



2020年度 四川外国語大学（重慶） 「日本語専攻大学院教育特別講義」

四川外国語大学ホームページに掲載された菊池実さんの講義の様子を紹介します。



11月11日午後2時半から、立德楼 C417 日本文化体験室で標記の特別講義が行われました。今回の特別講義は、本学部外国語教師の二又淳准教授による「江戸の和本」と菊池実教授による「重慶の抗日戦争、解放戦争の遺跡」の二つでした。司会は本学部の二人の教員が行ない、講義には本学の教員と大学院生、一部の日本語専攻の学部生（高学年）が参加しました。

前半の講義では二又先生が「和本」の入手方法について話しました。直接古書店で探すほか古書目録やヤフーのオークションサイトを通じての購入も可能だとして、その利用方法を説明するとともに「古本祭り」という販売のイベントも紹介しました。先生は写真やビデオを使って古書の現状を説明しました。

次に日本独自の「文字絵」を見せてくださいました。「文字絵」は日本のかな文字を使って面白い絵を描いたものです（注①）。この「文字と絵の一体性」を見て、創作の独特な魅力に感銘を受けました。

そのほか先生は浮世絵を通じて江戸時代の印刷技術について語り、銅版や木版を用いた美

しい印刷絵図を写真で披露したあと、先生自身の和本収集歴と保存方法について語ってくれました。

講義の後の質問に答えて、日本では17世紀以前の印刷技術が限られていたため出版物も少なく貴重だが、17世紀以降は出版点数も増えて価格も下がった。もちろん内容的価値が重要だが、日本の古書は大体二つの時期に分けて考えることができると話されました。最後に、司会をつとめたチェ



ン・コラン先生は、二又先生のような「愛書」「蔵書」「読書」が大切だと助言しました。

休憩の後、後半の講義でまず菊池先生は中国語で自己紹介を行いました。学生たちは非常に親しみを感じました。先生は、同じ戦争でも国によって呼び方が違う点を話し、徐々に本題に入りました。

中国の戦跡の現状と日本の戦跡の現状の違いに言及し、日本の戦跡判定基準を説明しました。日本の敗戦当時、日本軍は多くの書類を焼却し、戦争の証拠を埋め、関連の品物を河川に投げ捨てるなどしたため戦争史の研究が困難になったと語りました。

したがって戦争の歴史を明らかにするには、保存されている文書・記録など文献の「非埋没データ」と地下や水中から発見される「埋没データ」の両方を研究する必要があると語りました（注②）。

次に重慶に残された抗日戦争、解放戦争の遺跡を紹介し、特にヤン・フーチョンと重慶の関係に言及しました（注③）。最後に菊池先生は「重慶の歴史散歩」というアイデアを話し、学生のみなさんと一緒に現地を歩いて重慶の歴史と文化を体験したいと提案しました。

講義後のワークショップで菊池先生は「中国と日本では歴史に対する認識の違いはあるが、『歴史を忘れるな』とか『歴史を教訓として未来を拓く』はともに理にかなった考えであり、戦争のもたらす惨害に対する警鐘となり得る」と語りました。

最後に司会のワン・ゾンユ先生が専門的観点から菊池先生とより深く意見交換を行いました。

日本人外国語教師お二人による今回の特別講義は、私たちの研究に多くの示唆を与えてくださるものであり、参加したみなさんの温かい拍手で終了しました。

[記録・写真]

リン・ホン、チェン・ホイリン

[翻訳] 松下英美

[補注] 内藤真治

(注①) 文字絵の代表的な例は「へへののもへじ」。「つるニハののムシ」でも人の顔になる。

(注②) 「埋没データ」の研究は「戦跡考古学」と呼ばれ、菊池実氏はその先駆的存在である。

(注③) ヤン・フーチョン（楊虎城）は中華民国の軍人（西北軍司令） 1936年12月、西安で張学良（東北軍司令）とともに蒋介石拉致監禁事件（西安事件）を起こして蔣を反共から抗日へと向かわせ、国共合作・抗日民族統一戦線結成につながった。

のち蒋介石によって捕らえられ重慶監獄に監禁されたが1949年、国共内戦に敗れて陥落直前、蒋介石の命令で本人、幼い息子、秘書ら6人が惨殺され埋められた。人民解放軍により遺体が発見され西安の「楊虎城將軍烈士陵園」に葬られた。中国共産党は「英雄」と評価している。

